

球団の組織マネジメントを これからの学校経営に生かす



習志野市立谷津南小学校長（前習志野市立谷津小学校教頭） さいとう 齋藤 ちさと 千里

1 はじめに

学校現場では、若手教員の育成や多様化する保護者ニーズへの対応、加速する情報化・国際化に伴う様々な課題が生じている。また、社会からの学校教育への期待は大きく、これからの時代に求められる教育を実現していくためには、「社会に開かれた教育課程」を具現化していくことが重要である。このような状況の中、子供たちの育成には「チーム学校」としての力が必要だと痛感している。そこで、企業における組織マネジメントを学び、これからの学校経営に生かしていきたいと考え、株式会社千葉ロッテマリーンズで1年間学ばせていただいた。今後は、以下に述べる研修成果を踏まえ、「チーム学校」として組織力を生かした学校経営の推進につなげていきたい。

2 研修成果

(1)目標の数値化と徹底した進捗管理

教職員が一週間単位で計画する「週案」を今まで以上に有効活用して進捗の確認をしたり、学年会で学年主任に確認させたりしていく方法を実行したい。さらに、現在も目標申告（PDCAサイクルの活用）に目標を数値化しているが、より具体的に設定し教職員自ら管理できるように、日頃から様々な機会を通して的確な助言をしていきたい。

(2)月ごとの評価と顕彰

日頃から、教職員を認め伸ばしていくことが大切である。目標申告時だけではなく、月に1回程度の短いスパンで、日ごろの授業の進め方や校務分掌上の取組を評価できるような機会を設け、積極的に称賛したい。

(3)情報共有とコミュニケーションの活性化

「報告・連絡・相談・確認」を周知徹底し、管理職からの情報も速やかに伝えていく。職員室の雰囲気をよくするために、管理職は職員との会話を重ね、アンテナを高くして適切な助言ができるようにして、風通しのよい学校を作りたい。

(4)おもてなしプロジェクト

私は、千葉ロッテマリーンズの行動理念を参考に、「子供の安全を最優先した環境を作り、子供・職員の小さな変化を見逃さず、準備周到、学校生活の見通しが持てるようにし、いつも笑顔で接し、楽しみながら行う学校経営（学校でのSTRIKE）」を目指していきたい。そして、「笑顔とあいさつ日本一」の学校を目指したい。

(5)外部人材活用

特別な教育的ニーズのある子供への対応を専門機関に相談することで教職員の精神的なストレスを軽減し、業務改善にもつながると考える。地域と連携し外部人材を活用できる「チーム学校」を確立していきたい。

3 おわりに

研修の成果を生かし、組織で動くよさを実感できるような学校経営をしたい。「チーム学校」として力を発揮していく上で、地域に協力を仰ぐだけではなく、地域へ貢献することが、地域から信頼を得、協力してもらえる体制づくりができることも学んだ。職員やる気を引き出す組織マネジメントに取り組んでいきたい。「笑顔とあいさつ日本一！」

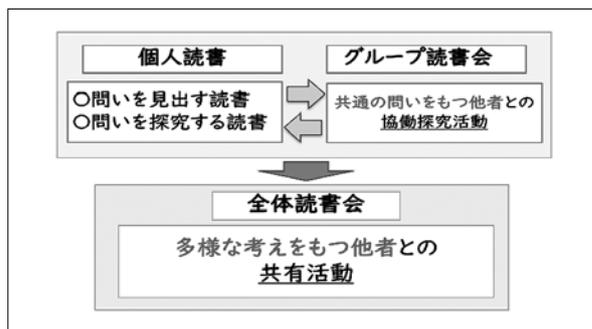
長編の文学を楽しむ読者の育成 —地域文学を語り合う上橋菜穂子「守り人シリーズ」の読書会—



千葉県教育庁教育振興部学習指導課指導主事（前我孫子市立我孫子第一小学校教諭） きむら なおふみ 木村 尚史

1 研究主題について

学習指導要領において複数の情報を関係付けながら考えを形成したり（知識及び技能（2）イ）、他者との共有を通して考えを広げたりする力（思考力、判断力、表現力等C（1）カ）の育成が求められている。そこで、文学の学習指導においても、長編作品の学習材化や読者としての資質・能力を向上させるための単元開発が重要であると考えた。本研究では地域を代表する作家である上橋菜穂子の長編「守り人シリーズ」を学習材化し、様々な読書指導を行うことで長編の文学を楽しむ読者を育成したいと考え、本主題を設定した。



資料 個人読書と2種類の読書会

2 研究の実際

(1)事前学習 「守り人シリーズ」への誘い

作品の読み聞かせや余読を促すアニメーション、原作・ドラマ・アニメ・漫画を読み比べる活動、種類・冊数共に充実させた読書環境の整備等、「守り人シリーズ」への興味・関心を高める取組を行った。

(2)主単元 「守り人シリーズ」の読書会

- ①実際の読書会の映像や作成した台本型手引きを用いて、本単元に必要な力や学習への見通しをもたせた。
- ②教科書教材「きつねの窓」を用いて、問いを見出したり、読書会を行ったりする力を習得させた。
- ③「守り人シリーズ」を用いて、作品への問いを協働探究する“グループ読書会”と多様な考えを共有する“全体読書会”を行い、“問いや考えを形成しながら読む力”と“多様な読みを尊重しながら自分の読みを広げ深めようとする態度”を向上させた。

④3種類の振り返り活動を行うことで、自らの学びを様々な角度からメタ認知させることができた。

(3)事後学習 上橋コミュニティの創出

休み時間の読書会や市民図書館でのワークショップ等、地域の大人や教師、他クラスの友達など、様々な人と上橋作品について語り合うコミュニティを具現化することで、学習の時間以外でも長編の地域文学を楽しむ姿を実現することができた。

3 研究のまとめ

地域の長編の文学を学習材にした単元開発、児童の興味・関心を高める段階的な手立て、自分の考えを形成する力を育む2種類の読書会を行うことが長編の文学を楽しむ読者の育成に有効であることが明らかとなった。

今後は、読書指導のカリキュラムを見直ししながら、自分で本を選ぶための力や日常で継続的に本を読み進めていく力の育成も併せて行っていきたい。

なお、本研究についての詳細や学習指導案については、総合教育センターWebサイト“Wakaba”に掲載されているため、是非ご活用いただきたい。

表現力を高めるための図形の証明指導 —フローチャートの考えに基づいた図の活用を通して—



袖ヶ浦市立蔵波中学校教諭 さいとう たかし 齊藤 崇

1 研究主題について

記述式の証明問題の解決において、演繹的に考えることができても記述の仕方が分からずに無解答となる実態がある。そこで、図形の証明問題に対して、フローチャートの考えに基づいた図を活用することを通して表現力を高め、ひいては心豊かな生活をより一層営む一助とすることができるのではないかと考え、本主題を設定した。

2 研究の実際

(1) フローチャートの考えに基づいた図の活用

第2学年の「第4章 図形の調べ方」、「第5章 図形の性質と証明」(啓林館)の学習の際に証明を記述する上で、フローチャートの考えに基づいた図(図1~3)を段階的に生徒に提示した。図1については、学習段階によって枠内の内容に関する記載を無くした図や途中まで証明の流れを示したものを取り入れるなどして、生徒自らが構造を把握できるようにした。

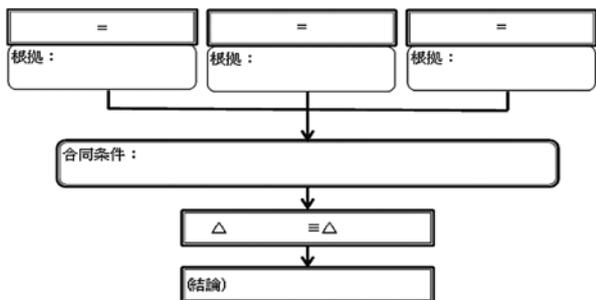


図1 証明の具体的な流れを示した図

図2以降は黒板などに示し、証明を記述することができない生徒が必要に応じて参考とするようにした。

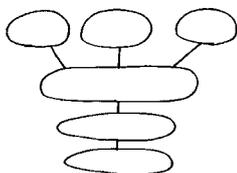


図2 等しい辺や角とその根拠の記述をまとめた図

その後、簡素化した証明の記述の一部を空欄とした枠(図3)を与え、フローチャートの考えに基づいた図から証明の記述へ移行できるようにした。

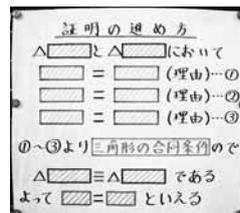


図3 簡素化した証明の記述の枠

(2) 効果の測定

図形領域において、証明が記述できなかった生徒が記述できるようになった状態を表現力が高まったと考え、まず既習の内容から表現力に関する事前調査を行った。その後、無解答だった生徒が学習を終えて、実際の証明問題が記述できるようになったかを調べた。

その結果、事後の調査では記述式の三角形の合同から結論を導く証明問題に対して、必要に応じてフローチャートの考えに基づいた図を活用して記述することで、無解答の生徒が減った。

更に、フローチャートの考えに基づいた図を証明の構想に用いることによって、振り返った際に証明の論理が誤っていたことに気付くことができた生徒もいた。

3 研究のまとめ

図形の証明を記述する問題を解く場面において、フローチャートの考えに基づいた図などを工夫して用いることで、生徒は構築した論理を記述し、表現する力を身に付けた。

今後の課題としては、証明問題の文章が長文になったり、数学的表現が多様化したりすると証明の問題文を読み取ることができない生徒が出てしまうため、その生徒に対する手立てを検証していく必要がある。

実社会との関連性を見だし、生徒の意思決定を促す理科学習 —「自然と人間」における関わりを重視した印旛沼学習の教材開発—



佐倉市教育センター指導主事（前佐倉市立臼井南中学校教諭） 谷野 研

1 はじめに

中学校理科第2分野最終単元「自然と人間」の学習で印旛沼を取り扱った。

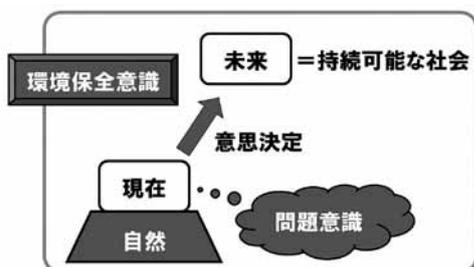
印旛沼を学ぼうとするとたくさんの問いが生まれてくる。「なぜ、カミツキガメがたくさん生息するようになったのか?」、「なぜ、全国湖沼水質ランクワースト1位なのか?」、「かつて『あばれ沼』と呼ばれるくらい洪水が多かったのはなぜなのか?」、「どのようにその水害を克服してきたのか?」、それらの問いを一つ一つ整理していくと、地域の自然環境である印旛沼と流域に住んでいる人々がどのように向き合ってきたのかが見えてくる。

そんな地域の自然と人間の関係を「持続可能な社会の実現」という視点で見つめ直し、未来への意思決定を促す教材開発を進めた。

2 研究の実際

(1)単元構成の概要

実際の授業では、まず、自然は本来どのように機能すべきなのかを学習した。その上で、現在の生態系や印旛沼水系の水質や治水・利水の状況から持続可能な社会の実現に向けた課題を見だし、具体的な解決策を提案し合った。そのような活動を通して、生徒の意思決定を促し、持続可能な社会の実現の中でも特に、環境保全意識の向上をねらった。



(2)検証授業における具体的な工夫

①自然環境への認知を高めるための工夫

生態ピラミッドのモデル操作、土壌動物の観察や微生物の培養実験を、各班で行うことが可能な教具を作成し、自然界の具体的なイメージを膨らませるようにした。

また、実際の河川水を理科室に持ち込み、水質調査を行った。地勢図や河川環境の写真と合わせ、印旛沼流域の環境を考察した。

②実社会と関連させた授業

漁業、カミツキガメの防除、上下水道とのつながりや洪水排水管理など、印旛沼を取り巻く環境保全、治水、利水などの各種事業における自然と人間との関わりに着目した資料を作成し、各授業を展開していくようにした。

③問題意識を高め、意思決定を促す工夫

毎時間、振り返りシートを活用することで、思考や認知過程の内化・内省・外化を促す手立てとした。

解決案を表現する際には、「見通しの輪」などの思考ツールを用いて、思考の可視化を円滑にした。解決案の発表では、相互評価をしながら聞き合い、最後に個人の解決案を再検討させることで、意思決定を促した。

3 おわりに

地域教材を取り入れた授業の展開から、自然と人間に関わる問題意識が高まり、身の回りの自然環境と関連させた意思決定が促され、環境保全意識の向上が見られた。

詳しくは、センターWebサイト「Wakaba」の学習指導案、研究論文・研究報告書をご覧いただきたい。